

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ギアアーイー・レイラー (Ghiaee Leyla)

ギアアーイー・レイラー氏の博士論文「ペルシャ語児の使役構文の習得—使用依拠アプローチの観点から—」の審査結果について以下に報告する。本論文は、ペルシャ語の言語習得という、先行研究のきわめて少ない分野に取り組んだ研究である。論文は全6章からなり、巻末には実験に使用した画像やビデオクリップの一部が再録されている。

第1章「問題提起及び研究の概要」は使役概念の幼児による獲得について述べ、問題提起をしたのち、ファールスィー(現代標準ペルシャ語)の予備的考察を踏まえた上で、ペルシャ語における使役構文の定義を述べている。先行研究における扱いを概観に続き、研究で使用する2種類のデータ(横断的発話データ、縦断的発話データ)が紹介されている。

第2章「CHILDES(MacWhinney2000)における5人の縦断的自然発話データの考察」では、言語習得データベースであるCHILDESにおける5人の縦断的発話データの考察を行い、どの使役動詞の種類が一番最初に発話され、どの使役動詞のグループの誤用数が一番高いのかについて論じられている。

第3章「ペルシャ語児98人(男児41、女児57人)の横断的発話データ」においては、著者自身が行った産出実験にもとづいて、ペルシャ語児98人の横断的発話データが分析・考察されている。この98人は年齢ごとに5つのグループに分類され、各年齢グループにおける3つの種類の使役動詞の誤用パターンの分析が行われている。

第4章「CHILDESのデータと横断的発話データから見える事実」においては、先行する2つの章で観察した産出データのパターンが検討され、誤用の原因について詳しく論じられている。今井と針生(2007)の音象徴ブートストラッピング仮説と、ペルシャ語児の初期段階の「使役」の概念の関連が論じられている。更に、大人の言語と比較して、ペルシャ語児の語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞、それぞれの誤用パターンについて考察が行われている。

第5章「発達段階ごとのストラテジー及び『使役』概念のカテゴリー化」では、ペルシャ語児の発達段階ごとのストラテジーをもとに、一般的考察が述べられている。使役概念の獲得の考察とともに、その過程でどのような手がかりが利用され、どのように使役動詞の誤用が減少して無くなるのかについて論じられている。

第6章「結論」はまとめと展望にあてられている。

本論文の学術的意義については、以下の審査結果が得られた。

第一に、ペルシャ語における使役概念の言語化手段の習得について、包括的な姿を

初めて描き出したことは高く評価することができる。語彙的手段、形態論的手段、助動詞的手段（様態語＋軽動詞による複合形式）それぞれの明確な特徴づけを行ったうえで、習得順序のパターンおよび誤用例を示した研究は、先例のないものである。論理的な可能性としては、語彙的手段が文法上の操作を伴わないために、習得の最初期から用いられるという予測をなしうるが、実際には語彙素の結合操作を含む助動詞使役が最も早い段階から使用されることが明らかになった。これは、幼児には習得の初期から生産的なスキーマがアクセス可能であることを示唆する。同時に、そのスキーマは環境からのインプットによる学習の結果得られたものである。以後の発達段階およびエラーのパターンも、ゆるやかな発達のトラジェクトリを示しており、使用依拠モデルによる説明が妥当であるという主張がされている。この点は、言語習得研究における、生得的知識と学習の関与という課題について、一つの有力な見解を提示したものと評価される。本論文はまた、理論的側面だけでなく、研究データの蓄積という点からも、豊富な縦断的一次データをおさめているという点で価値の高いものである。

第二に、大人の話すペルシャ語には擬態語がきわめて少ないにもかかわらず、幼児の発話には、特に使役事象の手段・様態を表すさいに擬態語が多用されることが明らかにされた。この点は、近年重要性が再認識されている、言語習得における音象徴の役割について新たな支持を与えるものである。本研究における重要な創見の一つは、幼児は身体感覚をもとに擬態語を創造的に使用し、それを媒介として言語的な使役動作の概念を習得していくという点である。身体動作および音象徴を介して使役概念習得のブートストラッピングが起きるとするならば、そうした側面と、事象の輪郭を規定する DPT (dynamicity, punctuality, telicity) 属性との関連性を指摘した本論文は大きな意味をもつ。本論文では、DPT カテゴリーの枠内で過剰一般化などの誤用がしばしば起きるが、このカテゴリーを越えた誤用は見られないことを明らかにしている。この事実は、ペルシャ語だけでなく、意味の面から見た言語習得の解明に新たな知見を加えるものである。

審査においては、幼児における結果の焦点化と、自他の誤用との境界の判断の難しさ、および「(標準) ペルシャ語」の範囲の規定についての注意点などが指摘されたが、これらは本論文の学術的価値をそこねるものではない。また、審査では、擬態語の使用についての日本語とのさらなる対照分析の必要性、本論文で考察されている DPT 属性の位置づけ、といった論点をめぐって、有益な議論がかわされた。

以上、本論文は先行研究がきわめて限られた、ペルシャ語における幼児の使役構文習得研究という課題に挑み、多くの貴重な知見を提示した。学術的価値がきわめて高く、この分野における優れた研究成果として高く評価すべきものと判定する。したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。